モンゴルノートⅢ

２０１１年７月１０日

２０１０年、正月のヤマギシ会運営研鑽会。
会場には、１００人を越える人々が集まっている。

１０数年前から運動の停滞が始まった。
内外の批判などから、村外会員の離脱、村からの脱退者が続いた時期である。
運動の前途を悲観したのか、村で長く運動を支えてきた人たちや、運動の中心にいた人々も、次々に「自ら」袂(たもと)を分かち、村を去って行った。

残った村人は、「何度かあった分裂」や「経済的試練」を乗り越えてきた人々である。
一言に５０年というが、もともとの血のつながりのない者同士の一体（連帯）である。

激動期には「一体の深さ」や「実顕地の本質」を見る目が、ことあるごとに自分自身に問われて来るのだ。
今回も、やはり、その時期の毀誉褒貶（きよほうへん）に左右されない、腹の据わった人間が残ったということになるのかも知れない。

ことさらに、問題点としてあげれば切りがない。
批判しようとすれば、幾らでも材料は転がっている。

人間が複数いるだけのことで、何かと意志の疎通もままならないこともある。
微妙に違う、それぞれの「運動観」や「生活観」が良さになるときと、食い違いになるときがある。それらを含めて、他の人と、どこまで行っても自分からは離れない一枚岩を、自分の心の中に用意できるかに、その人の「一体」がかかっていると思うのである。

どこか、夫婦の愛に似ているのかも知れない。

一人一人の自覚に依ってしか成り立たない運動である。
一人一人の資質をみれば、良さもあるが、やはりどこかに欠点があり、少なからず頑固も持っている。
それ故に「本質的」でなければ、ずるずると処世に縛られてしまう。その「本質」を、凡人である自分たち一人一人が、常に用意する覚悟があるか否かの連続である。

研鑽会は、だらだらと盛り上がりのないまま進む。
「先が見えない」「これからどうするんだ」という話に終始している。
発言しようにも、楽観的な運動の話などは、この場にふさわしいとは思えないのだ。

突如、ゲレルマは立ち上がり、モンゴル訛りの日本語で語り始めた。
「わたしは、こんな話を聞きに来たのではないョ。
運動にいろいろな時期があるのは当然だと思うネ。そんな弱気で何が出来るのですか」

「ワタシの7歳の時、もみ合いがあって、おとうさんがパジャマ姿で連れ去られたネ。
どこに行ったかわからないネ。みんなで泣いたよ。
でもお母さんは、ワタシ達5人の子供を育ててくれた。
おとうさん居ないから、泣いて暮らしたよ。寂しかったし、怖かった。
後で知ったけど、モンゴルの指導者は、みんな連れて行かれたよ。
ソビエトの仕業だよ」

「それから2年半経った夜に、おとうさん、行ったときと同じパジャマで帰ってきた。
死んだかと思ったから、うれしかったよ。
おとうさん、何があったか、とうとう、わたし達に言わなかった。
生きて帰ってくるのに、たくさんのことがあったと思うネ」

「おとうさん、それからアミダナル協会つくった。
ヤマギシの循環農法をやるんだって言ってたのに、
日本で倒れて死んじゃったの。
だから、ゲレルマは、おとうさんの意志を継いで
モンゴルに、ヤマギシの村をつくろうとしてるんです」

「みなさん、一緒に元気出してやりましょうよ。ネエ、ニッポンのみなさん」

会場は、静まりかえり、やがて大きな拍手の波が会場に響いた。

１９２１年、外モンゴルは、ソビエトの後押しで数世紀に及ぶ清朝支配から独立を果たし「モンゴル人民共和国」と名乗った。

しかし、実質は清朝からソビエトに支配者が替わったに過ぎなかった。

それから４０年間の年月が流れた。

１９６１年、外モンゴルは、ソビエトのくびきから離れて、晴れて独立国「モンゴル国」として国連から「承認」を得た。

この間、モンゴルの独立運動家や分断された民族の統一を計った人々は、ソビエト政府によって粛正された。

その数は数十万人に及ぶという。当時、外モンゴルの人口は７０万人ともいわれているから、その数の多さに粛正の内容がどのようなものであったかが推察され、人類の一面とはいうものの、その惨（むご）さに戦慄する。

時代が少し前であったら、人民革命党の幹部であったゲレルマの父もスターリンに粛正されたのかも知れない。

そして、ゲレルマ達家族の前に、二度とその姿を見せることはなかったに違いないのだ。

ロシアは、１３〜１４世紀にかけて、モンゴル帝国（キプチャク汗国）チンギス・ハンの長男ジュムチ（略奪された妻が産んだ子で、チンギス・ハンは「客人」と名付けた）の孫のバトウの支配下にあり、その屈辱は「タタールのくびき」として語り継がれて、モンゴル民族を恨むことが甚だしいといわれる。

しかしながら、モンゴル人がロシアを去った後、ロシア帝国はモンゴルの支配構造をそのまま踏襲したといわれる。

僕が少年の頃、ヨーロッパの国々と比べ、ロシア帝国がどこか異質な感じがしたのも無理からぬことだったのかも知れない。

ビャン　「ヤマギシの村で、肉鶏を飼っているっていうと、
なんで、そんなところで肉鶏を飼っているのかって、
日本にいるモンゴル人、みんな変な顔するんです。
セッカク、日本に留学して、ハクをつけているのに、駄目じゃないか
モンゴルの人、怒るんですヨ
でも、ビャンはヤマギシの村で勉強して,モンゴルにヤマギシの村つくるんです」

ビャン「ヤナギさん、ボクは血液のガンで死ぬかも知れない。
でも、死んでもいいんです。
モンゴルにヤマギシの村が出来るんだったら」

ゲレルマ「オトウサン、モンゴル人が中国の質の悪い食品でガンになったりする。
モンゴルの農業がダメになっていくのが分かるから、モンゴルの各地にいる
モンゴルの農業を思う人達とイッショに、アミダナル協会つくって、
ヤマギシのジュンカン農法でモンゴルの農業をやり直すんだと言ってたヨ。
デモネ、日本に来たとき倒れてネ、死んじゃったの。
モンゴル人、日本にお墓ないし、埋められないから、冷凍にしてモンゴルに
運んだネ、モウ、たくさんお金かかったね。仕方ないヨ」

ゲレルマ「モンゴルでそういうこと（特講）やるんだったら、応援する人たくさんいるヨ
オトウサンの友達、たくさんいて、みんな応援してくれるっていうネ。
羊、何頭もっていったらいいのかって聞いてくれるヨ」

ビャン「ビャンは、もう2年働いていないでショ
ツマ（妻）は、アルバイトを二つして、子供を育てている。
ツマは怒るけど、モンゴルの為だからっていうのだけど、分かってくれないヨ。
そう、ツマは大学の一年先輩で一つ年上。そうだヨ、姉さん女房だヨ」

ビャン「ビャンは、格闘技で有名になろうとしたけど、おとうさんが反対するので
やめたんデス。デモ、娘がこんど神奈川県のレスリング大会で、優勝するかもしれ
ないんデス。ウレシッスヨ。

ビャンは、格闘技やめて、国会議員になるんです。ヤナギさん」

ビャン　「僕は、モンゴルに帰ったら、人民革命党のウランバートル市の幹部なんデス。
本当はウランバートルの市会議員か国会議員になってるはずだったんデス。
デモ、ヤマギシの村をモンゴルにつくりたいから、
それだけですよ。ヤナギさん」

ビャン　「３２才でしょ、もうモンゴルでは若者ではないんです。
政治家としては遅い出発になってしまうから、焦りもありますよ」

◇◇◇

それでもなお、民族の悲願である「独立」を得るための捨て身の運動は途切れることはなかった。その悲願、清朝の２００年、ソビエトの７０年の支配を越えてなお湧き上がる民族独立の根拠はなんであるのか。

それはかつてユーラシアを席巻し、パン・モンゴリアン（モンゴルによる平和）と歌われた過去の栄光でへの執着であるのか。

ユーラシアのさまざまな民族がそれぞれの時代の帝国や国家に併呑されてたにもかかわら

ず、１３世紀に起こった民族が２０世紀になってまで民族の独立を切望して止まないその根拠がどこにあるのか。

すこぶる厳しい自然環境の中で、生産性の低い遊牧という生産手段で生活する彼等に、どのような連帯の絆があるのであろうか。

１３世紀から１７世紀まで、モンゴルの歴史は空白であったという。

たまたま発見された「モンゴル秘史」によってその時代の空白は曲がりなりにも埋められたのごとくである。

しかし、民間の遊牧民の長い歴史の中で伝えられた彼等の民族の歴史は、一つの物語を語れば一週間はかかるといわれる「口承文学」がその役目を果たしたに違いない。

日本の「平家物語」は琵琶法師に語らせると一体全体どれだけの日数がかかるのであろうか。

口承文学
文字を持たなかった民族の長い冬景色
語り部の物語は「ゲル」に人々を寄せた
チンギス・ハンやフビライ・ハン
過去の祖先達の栄光や挫折
テングリ（上天）や白い馬の話がつぎつぎと語られる
物語は　子供達の血を沸き立たせている

そして子供達は、「モンゴルの誇り」を身にまとい
来るべきときの自分の有り様を心に刻んだに違いない。

◇◇◇

ゲレルマ「ワタシネ、１８才の時、頭を丸坊主にして、軍隊に志願したのョ。
オトウサンが手を回していてネ、
担当の人がワタシを父親の事務所に連れて行ったの。
軍隊、行けなくなっちゃたんだョ
ワタシ、怒ってね、何日も泣いたよ。
モンゴル、祖国だから、ホットケないでしょ」

ビャン「ウランバートルで、携帯電話の会社に就職が決まっていたんです。
デモネ、迷いましたよ。ヤナギさん。
自分のことだけだったら、迷いませんけど。
モンゴルで特講をやってから、それから自分のこと考えても遅くないでしょう。
へへッ、自分のこと考えるの苦手です。ビャンは。
モンゴルのこと、考えるの、大好きです」

僕の出会ったモンゴルの人々は、誇り高く、既に捨て身のようでもある。

アマガもムンクもムンフーも、そしてガンゾリグも特講を受けると、さっさと仕事を辞めてしまった。
「どうするのか？」と聞いたら「ヤマギシの運動やります」と来た。
モンゴル人は先のことはあまり考えないということでもある。
過酷な風土に住む民族としては、なんとなくおおらかである。
このあたりが、モンゴル人の良さなのかとも思っているのだ

ゲレルマ「ダッテ、ガンゾリグ、教師辞めてから働いていないから、お金ないよ。
この運動やるんだから、仕事なんかしていられないっていうしネ。
お金、出て行くだけだから、家具やコンピューター売って暮らしているヨ。
ウーレー、子供だっているのに、文句言わない。
奥さんがイイから、ガンゾリグ、働かなくていられるのヨ
どうして食べられているのかって、ハハッ、モンゴルだからネ」

ゲレルマ「お金、もう全然ないよ。
ヤマギシは給料安いから、まあネ、ＫＳはたくさんお金くれたヨ
デモ、後悔してないよ。
この間、ガンゾルグにお金送ったのが、
うちのおとうちゃんにバレちゃった。

おとうちゃん、口、聞いてくれない。
やさしくしても、ダメなんだ。ツライネェー。ヤナギさん」

ガンゾルグは、２０１０年暮れ、日本の研鑽学校に参加した。
革命の志高く、意気揚々と参加したが、同じテーマでも日本人の出す「内容」は、日常生活の取るに足らないことのように思えて失望した。
しかし、モンゴルにヤマギシの村をつくったとしても、人間として避けられない日常の暮らしの中で発生する「様々な事柄」や「感情」など、それをどう捉え、どう解決し、共に納得して、次の段階に進んでいくことを、一歩一歩やっていくことなのだと理解した。
いや「理解しようとした」までかも知れない。

ゲレルマ　「ワタシネ、モンゴルの新聞の一面に、
モンゴルで優秀な学生３人に選ばれたことあるヨ。
留学先をドイツにするか、日本にするか、ワタシが迷っていた時に
オトウサン、日本に行きなさいと言ったネ。
言うこと聞いて良かったネ。ネー、ヤナギさん。
オトウサン、日本が大好きだったからネ。
キット予感がしたんじゃないかナー。
死んだオトウサンの意志があるデショ。

ワタシ達、兄弟、一緒にやるヨ、ゼッタイダョ」

◇◇◇

国境によって民族が分断されたモンゴル諸民族。国境に接するソビエト、中国、満州国は、民族を共に独立させたいと思う「汎モンゴル主義の活動家」の悲願を徹底的に打ち砕き粛正した。日本というひとつの軍事大国が、大陸に傀儡（かいらい）国家をつくり、さらにモンゴルの国をソ連との防波堤にするために戦争を起こしたこと。ホロンバイルを舞台に、いくつかの国家と民族の思惑が坩堝（るつぼ）になって、モンゴルの人々を苦しめた。

それでも、外モンゴル（現在のモンゴル国）はようやく独立国として国連の承認を得ることが出来たのだ。

その間のモンゴル民族の苦衷と犠牲は、その実態を知るほどに戦慄を禁じ得ないほどのすざましい惨劇の痕跡を歴史上に残しているのである。

もし、１３世紀にチンギス・ハンやフビライ・ハンが生まれなかったらと考えてもみた。

また、モンゴルの人々の誇りであるチンギス・ハンが偉大な指導者でなかったら、今のモンゴルという国は存在しなかったかも知れないし、中国の搾取があったにせよ、７０万人の人口の何割かを失っても得ようとした「独立国」というものへの切実な願望。

「独立」ということへのゲレルマやビャンなどのモンゴル人の皮膚感覚は、日本人である自

分たちに実感としては持ち得ないのかも知れない。

子供の頃、通っていた幼稚園にアメリカの兵士が慰問にやってきた。
子供心に兵士を憎むということはなかった。
社会の中にも、親たちの中にも、
アメリカ兵に石を投げたりする風潮はなかったし、
アメリカ兵がきれいな幼稚園の先生を二人も嫁さんにして連れ去ったことなど。
「横浜の波止場から船に乗って、異人さんに連れられていっちゃった♪」
と歌っていたこともある。
幼稚園の先生が、その後、アメリカでどのような暮らしをしたのかは知らない。
母親は「アメリカさんがみんなお金持ちとはかぎらないのに」と言っていた。
幼稚園の近くにクリーニング屋があった。
後年、アメリカの日本人移民はクリーニング屋が多いと聞いた。
人のいやがる仕事を引きうけて、
アメリカ社会で生きていくすべを見いだしていった日本人移民のたくましさと悲哀。
僕はクリーニング屋の前を通ると、なぜか自然頭が下がるように思ったものだ。
余談である。

日本人の特性として、激しく憎んだり対立したりすることは苦手なのかも知れない。自分たちの同胞をたくさん殺した敵国の兵士に対する感情がこういったものだというのも、長い歴史

の中での民族的な感性というものなのかも知れない。

しかし、民族が他民族を支配する。

この不合理をなぜ人類は営々と試みるのであろうか。

結局は、双方が傷つき、その恨みは相互に相乗して、なかには世紀をを越えた紛争になっていることもある。

「タタールのくびき」は「ロシアのくびき」として7世紀後に現れたともいえる。

このような解釈も事実というより、後世の歴史観のこじつけに近いかも知れない。

しかし、支配は次の支配を生み、くびきは次のくびきを生み出さずには置かない。

とすれば、人類はどこかで、この苦しみの連鎖を断ち切って、ささやかでも、人々が愛し合い、植物や家畜が豊かに生存することのできる。地球上に愛の発露を目的とする国家なり、いいや村落でもいい、そのようなことを目的とする愛の一体家族を、地球上に顕すことを現代の人類の目的としようではないか。

と自分は我田引水をしてしまうのである。

自分たちの「一体社会」づくりのささやかな運動に於いても、人類の持つ複雑な心の側面の解決なしには、真の豊かな「一体社会」は望むべくもない。

国民の幸福度にピントを合わせた国家運営をしている「ブータン」という国もある。

先進国といわれる国々は、対立と競争に明け暮れ、グローバル経済は世界経済の破綻に向けて一直線に走り出しているように見える。

国家の運営も家庭の運営も一個人の運営も極めるところ「本質的な幸福」とはなにかという観点で、今一度、すべてのことを洗い直してみてみる必要があるのである。それはそんなにむずかしいことではなく、「一体観」という切り口でみてみるだけのようにも見えてくるのだ。

私見だが、何でも二通りある。
その一方は一体への道。
また、その一方は対立の道。
人間にはいつも二通りの道が用意されてあり、
心の置きどころでその生き方は決定される。

２０１１年１１月、春日山の村のテーマは、
「今そのままでよし」からの出発と
「今のままではアカン」からの出発の異い。

「今そのままでよし」
何を甘っちょろい。そんなことで、この厳しい世の中をいきて生きていけるかい。
「今のままではアカン」
そや、アカンやろ。人間には向上心というものが必要なんだ。
それでいいと思っているの、アカンやろ。あんた。
ねえ、世の中、そんなんじゃあ通用しないよ。アンタ。

アカンというのが、観念であるとしたら、アカンとするのは頭の中だけにあり、その観念で人を縛り、自分をも縛ることになってくる。やはりどこか苦しい。

次々に苦しみやつらさがやってくるように思えてならない。

「そのまま」というのが事実であるならば、そして自分自身を責めることなく、他も責めることなく、自分の真に願うところに標準を当てて、そこを面白く楽しくなるように取り組んでみるのも人生である。

それはひょっとしたらもっとも厳しく、もっとも理（ことわり）に満ちて発露することなのかも知れない。

将棋の段が上がるも格落ちも楽しめたら人生は最高である。

対立の中に安息はなく、対立の中に豊かさは望めない。

そして、歴史上の様々な帝国の盛衰や民族間の争い、宗教戦争などを考えると、一体全体、それがなんだったのかと不思議な思いにとらわれることがある。

そのことの意味を考えると、その意味の根拠がだんだんに薄れてくるのも事実である。

人間は、何を目的に何を根拠に生きていったら良いのだろうか。

現代でも、たくさんの人々が、戦争や民族紛争で死んだ。

未だ、地球のあちこちで飢餓に瀕する人々が、救いの手をさしのべているという実態はあるにしても、それでも地球上の人類は増え続けて７０億人に達したという。この人口増加は、何

なのであろうか。やはり滅亡に向かっているのであろうか。

こういった問題は、一酪農家が触れるようなことではないのかも知れない。

しかし、地球の一構成員として、心配でならないというのも偽りのない心情である。

人間は、幸福を求めて様々な活動をしているのだが、一体社会を標榜（ひょうぼう）する我等がヤマギシズムをして、しかり、その標準が世界人類の幸福にピタリと合っているかが問題である。

世界の心ある諸兄姉に、
共に、心尽くさしめて、
なお、心のありようを尋ね、
なお、心のありようを尋ねるべき。

※原文にはモンゴルのノモンハン事件前後の革命史（年表）が付記されていますが、長大になるので割愛しました。

モンゴルの革命史について、興味のある方は春日山実顕地の柳宛にご連絡ください。